

図書館報

89号

平成24年10月29日発行



02 札幌館長に就任して

10 貸出人気ランキング

03 ビブリオバトルは面白い

11 平成23年度利用統計

04 特集・読書のススメ

12 附属図書館からのお知らせ

08 図書館学生センター活動報告

札幌館長に就任して

西原 千博

今年の4月から札幌館の館長になりました。これまで札幌館の館長は、全学の図書館長が兼務しておりましたが、今年度より他の4館と同様に札幌館も独自の館長を置くことになりました。

最近の札幌館の話題としては、今年の2月からコミックを入れたことがあげられます。昨年度の収書委員会の方針として、テーマに沿った選書を行う、というものがあり、たまたま、私が教養で開講している「表象文化論Ⅰ」の参考図書がその対象となりました。講義のテーマは「作中人物は生きているか」ということで、人形やアンドロイド、ピュグマリオン効果などをモチーフとしたコミックが集められています。授業では、作品のほんの一部しか紹介できません（長期連載の作品などどうにもなりません）ので、学生たちにはぜひ全体を読んで欲しくてお願いしました。最近は、他の図書館にもコミックはありますが、どこも手塚治虫などの決まりきったものばかりですから、このようにテーマに基づいて集められているのはここだけかもしれません。学生たちは、とても有效地に活用しています。（当初40名ほどだった受講者は、現在では150名をこえています。）

さらに、実はこのコミックは所謂「客寄せパンダ」の役割も持っています。普段図書館を利用しない学生が、コミックにひかれて図書館に来てくれればしめたものです。諺に「馬を川に連れて行くことはできるが、水を飲ますことはできない」というのがありますが、図書館は来てもらえさえすれば、読みたいと思う本はいっぱい有ると思っています。水（本）を飲ますのは簡単なのですが、川（図書館）に連れてくるのが大変なのです。折角の図書館なのに入館者が少ないとすることはとても残念なことです。

因みに、私自身はというと、昔から図書館が好きで、小学校の頃から学校の図書室に入り浸っていました。しかし、実はあまり図書を借りたことがありませんでした。そもそも中3の夏休みまで本を殆ど読まなかったので、借りることもなかつたのです。（算数が得意で、国語が大嫌いな子供でした。）どうも図書館という場所、空間が好きだったのですね。ですので、今回館長になったのを機に、図書館をもう少し居心地の良い場所にしたいと秘かに企んでおります。座り心地の良い椅子やソファーを入れたいのですが、どうもそんな予算はありそうもないですね…。

勿論、図書館の魅力は何と言ってもその蔵書にあります。そのためにも選書のより一層の充実を計らなければなりません。また、テーマによる選書は今後も続けていきます。教員の皆さんの協力が必要です。推薦図書もどしどし選んで下さい。学生諸君も読みたい本をどんどん図書館に要望して下さい。一緒に魅力ある図書館にしていきましょう。そのためにもソファーが…、あれ？

（にしはら ちひろ）



ビブリオバトルは面白い

ビブリオバトルをご存知ですか？ビブリオバトルとは、他人に薦めたい本を持ち寄って紹介し、一番読みたくなった本を投票で決めるという、ゲーム感覚を取り入れた書評合戦です。

ルールは、4つのみというシンプルさ。

1. 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる。
2. 順番に一人5分間で本を紹介する。
3. それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う。
4. すべての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員1票で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする。

ポイントは、レジュメやパワーポイントなどを用いずに口頭だけでプレゼンすることです。

昨年の「ビブリオバトル首都決戦2011」で、本学岩見沢校・杉目美奈子さんが優勝したことがきっかけで、附属図書館札幌館でも今年5月から学生サポーターと一緒にビブリオバトルを開催してきました。

第1回目は、新学期開始の慌ただしさが落ち着いてきた5月8日（火）、ゴールデンウィーク明けに開催しました。4月下旬に広報や当日運営について学生サポーターと打合せをし、開催前日には、学生食堂等で手作りフライヤーを配布したり、学生メーリングリストで広報したりと、学生サポーターの協力があってこその開催でした。バトラー（発表者）が集まるかが一番の気掛かりでしたが、学生サポーターが積極的に引き受けてくれ、本学学生の頼もしさを再認識しました。ボランティア活動に熱心なこと、人前で気負いなくプレゼンできることは、教師を目指す学生が多いゆえかも知れません。



ビブリオバトルは、様々な本が紹介されるので見るだけでも充分に面白いですが、バトラーになってみると面白さが倍増します。チャンプ本を参加者全員の投票で決めるというゲーム的要素があるので、どのようにプレゼンしたら聴衆の共感を得られるのか、どんな本を紹介したら勝てるのかを戦略的に考える面白さ、聴衆の前でプレゼンをする自己表現の楽しさ、質疑応答を通してのコミュニケーションの楽しさ等々。バトラーそれぞれが本を厳選するので自然と読書量もアップするでしょうし、5分という制約がある中で本の内容をコンパクトにまとめ、話すポイントを絞らなければならぬので、本の熟読にもつながるでしょう。ただし、本の内容をきれいにまとめ過ぎると、読まなくていいや、という気にさせることもあるらしいのでご注意を。

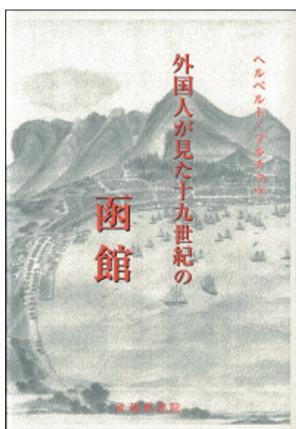
そして実際にビブリオバトルを観戦して感じたことは、チャンプ本はプレゼンの巧みさだけでは決まらないということ。外から得た知識を立て板に水の如く話しても感動してもらえないように、口下手でも心を込めて本の魅力を語った方が聴衆の共感を得ることがあるのです。チャンプになるには、本選び5割、プレゼン5割といったところでしょうか。

最後にビブリオバトルのキャッチフレーズを紹介します。

「本を通して人を知る。人を通して本を知る。」



Historical Hakodate ゆかりの本を読む



武蔵野書院 2007年

杉浦 清志=文

『外国人が見た十九世紀の函館』 ヘルベルト・プルチョウ 著

1991年にこの本の元になった英語版の“HISTORICAL HAKODATE”という本の出版記念会が開かれた時、著者のプルチョウさんが盛んに函館が好きだと言っていたので、なぜそんなに好きなのかと聞くと、日本の他の都市では自分を一人のガイジンとして扱うが、函館では隣人として扱ってくれるからだと答えた。函館がそんなに開けた町なのか半信半疑だったのだが、この本を読めば、少なくとも19世紀後半の函館が当時の日本で最先端の国際都市だったと思い知らされる。

しばしば函館を訪れ私とも仲良しだった著者はその頃、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の教授だったのだが、その後日本の大学に再就職し、一昨年急逝していたことを1年遅れで知ったのは、去年中国の瀋陽に出張していた時だった。最後まで私にもう一度会いたいと言っていたと聞かされて、私は泣きそうになった。

出来ることなら俺だってもう一度会いたかったよ、プルチョウさん。

(すぎうら きよし／函館校教授)



亜璃西社 2009年

小坂 麻綾=文

『なぜ、北海道はミステリー作家の宝庫なのか?』

鷺田小彌太、井上美香 著

この夏、あまりの暑さに、じっくり本を読む気になれなかった人もいるのでは（函館は百年ぶりの猛暑だったそうで）。読書にもってこいの涼しい秋、重厚な一冊を手に取ってみませんか？ そう、たとえばミステリーとか。というわけで、読書案内に使えそうなのがこちら。

この本を見れば、北海道にゆかりのあるミステリー作家とその代表作がわかります。著者によると、北海道、なかでも函館は、ミステリー作家を多く輩出した土地だとか。ミステリー小説は近代と共に生まれ、発展するそうです。開港して外国の新しい文化にいち早く触れたという函館の歴史が、ミステリーの水源になったようですね。函館出身の最近の作家としては、『雷桜』の宇江佐真理や、『償い』の矢口敦子などが紹介されています。他の道内出身者も、京極夏彦をはじめ今まさに活躍している作家ばかり。

この本を手がかりに、地元ゆかりの作家や小説を探してみると、新たな発見があるかもしれません。

(こさか まあや／函館校大学院2年)

竹野 恵里香=文

『函館散歩 まちは唄う』 北海道新聞函館支社報道部 編

やわらかなタッチの絵とともに、函館市を町ごとに紹介しています。

例えば、五稜郭町の五稜郭公園。春には鮮やかな桃色の桜が観光客を賑わせています。湯川町の温泉銭湯。今もなお地域の人たちを結びつける、身も心も温まる場所です。駅前の朝市。函館の台所として新鮮な海の幸を提供しています。元町の教会。演奏会などのイベントが催されており、厳かな鐘の音はぜひ一度聞いてみたいものです。

ページをめくる度に、まるで函館を旅行しているような気分になります。函館に行きたけど行けない！ そんな方におすすめです。また、地元の人が読んでも函館の新たな一面を発見できると思います。

人や建物、音楽、道……それぞれが街のアクセントとなり、街のシンボルとなり、そのすべてが合わさって一つの「街」が完成されます。函館の古き良きものが感じられるとともに、旅行気分を味わいながら、函館発展の様子など歴史を知ることもできる一冊です。

(たけの えりか／函館校2年)



北海道新聞社 2003年

読んでほしい、旭川を知る1冊

西川 恒彦=文

『大学構内の植物～北海道教育大学旭川校～2009～2011年』

齋藤和則 製作

あなたは身近な植物の名前を知っていますか。

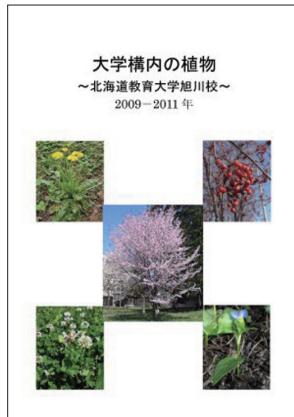
この冊子は旭川校理科専修・齋藤和則の修士論文の課題の一部として作成されました。新学習指導要領では身近な場所の生物についての知識が必要であると強調されています。しかし植物についての知識を調査したところ、教員を目指す学生でさえも小学校以来ほとんど知識が増えていないことが明らかになりました。

この冊子は、大学生が植物の名前を知る機会がほとんどありませんので、限られた範囲ですが、自らが旭川校の構内に生育する植物に関心を向け、より多くの植物を知って欲しいとの願いから作成されたものです。

この冊子は花の写真を中心していますが、樹木の葉も示しています。扱った植物数は約150種にもなります。4年間過ごす大学構内という限られた場所に生育する植物が対象なので、この冊子を参照にして構内の植物の名前を知ることが容易にできます。

本冊子は2009年から2011年の3年間の植物の開花時期を開花カレンダーとして載せ、また生育場所も示されており、記録としても貴重です。

(にしかわ つねひこ／旭川校教授)



齋藤和則 2012年

上村 亮輔=文

『〈旭山動物園〉革命—夢を実現した復活プロジェクト』 小菅正夫 著

いまや日本全国で言わずと知れた旭川の観光場所の一つである「旭山動物園」だが、そこに至るまでには幾多の苦悩があった。

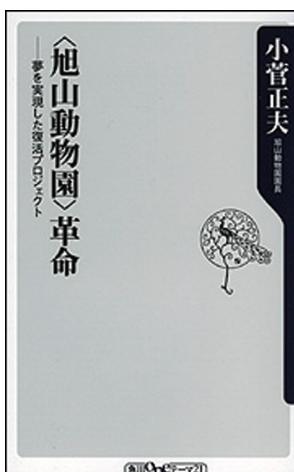
この本は閉園間際から人気再興までの苦悩と試行錯誤の挑戦を綴ったものである。

旭山動物園の特徴の一つでもある「行動展示」は、その動物に一番適した生活形態を追求した結果である。その裏側には、動物に対する愛情とそれゆえの日々の観察が鍵となる。相手が生き生きする環境の整備、適した素材を提供すること。それが難しいことは教育者なら知っているはず。それを当たり前のように行なうことが、組織の活性化につながり、日本一の動物園の第一歩なのだろう。

飼育員が動物と接する姿勢と教師が子どもと接する姿勢に違いはあるか。園長・職員が世界一の動物園にしたいと思う気持ちと、校長・教職員がよりよい学校をつくりたいと思う気持ちに違いはあるか。

地域性と職員と相手（動物）が生き生きと過ごすための日本最北端である旭山動物園での闘いを記した一冊である。

(うえむら りょうすけ／旭川校大学院1年)



角川書店 2006年

Nature & Landscape & Image around Eastern Hokkaido

道東の自然や風景といえば、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。世界自然遺産の知床、阿寒国立公園、釧路湿原や世界三大夕日、霧の街釧路など、皆さんが一度は耳にしたことがあるスポットが点在しています。そこで今回釧路館では道東の写真や映像、他にも釧路に縁のある写真家をテーマに紹介します。



時事通信社 1997年

『釧路湿原』 後藤昌美、C.W.ニコル 著

太陽と霧が織りなす幻想的な湿原、道東のシンボルである丹頂鶴、自然が細工した雪氷の文様など、道東の優雅な四季折々を収めています。優雅であり雄大であるからこそこの怖ろしさ、いわば大自然が与える畏怖ともいえるものを感じられる。それが釧路湿原なのかもしれません。

また、道東ならではの動物たちも可愛らしく道東の自然の様々な素晴らしさが写されています。道東観光の前に一度眺めておくと期待が膨らむ一冊です。



発売元：テレビ朝日
販売元：ポニーキャニオン 1995年

『報道ステーション 矢野健夫感動絶景シリーズ 知床』

世界自然遺産の知床。その絶景を鳥の視線で眺めてみませんか？

こちらの映像はモーターパラグライダーを使用し低空飛行撮影した画期的な作品です。もう既におなじみの知床かもしれません、違った角度から眺めてみるのもまた新たな景色の楽しみ方を教えてくれるかもしれません。高高度による俯瞰や、地面すれすれに飛行するスピード感など、普段の写真やドキュメントでは体験できない感覚で秋の知床を隅々まで楽しむことができます。

空を自由に飛びたいな… いつかは肉眼でこの風景を鑑賞してみたいものです。



NHK出版 2012年

『だけど、くじけない 子どもたちからの元気便』

長倉洋海と東北の子どもたち 著

道東に縁のある写真家といえば、釧路出身のフォトジャーナリストの長倉洋海さんが挙げられます。長倉さんは平成19年度、20年度に釧路校で特任教授として講義をしていただきました。長倉さんは、主に世界の紛争地や辺境に生きる人々の姿と笑顔を撮り続ける写真家として活躍されておられます。今回この写真集では東日本大震災を取り上げています。被災地の子どもたちの「言葉」と長倉さんが撮った「笑顔」、それらが併せ持った「生きる力」をとらえた一冊です。

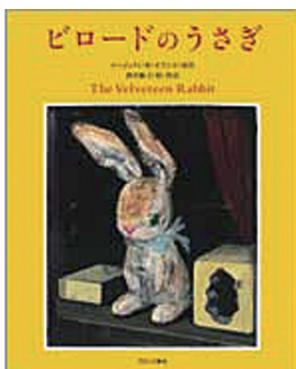
写真に関する本を3冊紹介させていただきましたが番外編でもう一つ。

釧路校図書館内ギャラリーにて、写真部による展示を不定期で行っております。北方領土の写真や釧路の写真のみならず、旅行に行った際の様々な風景を展示しています。釧路館にお立ち寄りの際には是非ご覧ください。

大人になった今だからこそ読んでほしい絵本

絵本は子どものための本だと思っている大人は多いと思います。しかし、絵本は子ども向けの絵や文章があれば成立する、というような単純なものではありません。絵、文章、版型、用紙など様々な要素が総合的にデザインされ、それぞれの要素が相互に作用し、意味を発することでイメージの広がりを読み手に与えてくれるのです。

岩見沢館では、「絵本=子どもの本」と考えている人達に向けて、「大人になった今だからこそ読んでほしい絵本」をテーマに、夜間学生スタッフ3人が絵本を選びました。今回はそのうちの数冊を紹介します。



ブロンズ新社 2007年

久保 あゆみ=文

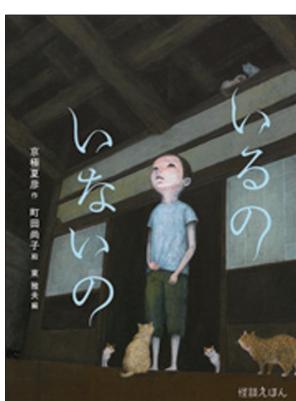
『ビロードのウサギ』

マージェリィ・W.ビアンコ原作／酒井駒子絵・抄訳

これはビロードで作られた小さなうさぎの人形のお話です。うさぎは持ち主である「ぼうや」にとって特別なぬいぐるみとなり、いつしか、ビロードのうさぎは本物のうさぎになりたいと思いはじめます。本物とは、何だろう、幸せとは何だろう。誰しも人生で一度は考える、そんな問いを投げかけてくる絵本です。

黒を下地にした、それでいてあたたかくやさしい、繊細なタッチで物語の世界観をより一層魅力的なものにしている酒井駒子さんの挿絵にも注目の一冊です。

(くば あゆみ／岩見沢校大学院1年)



岩崎書店 2012年

山間 香綾=文

『いるの いないの』京極夏彦作／町田尚子絵

怪談、と聞くと嫌がる人も多いかもしれない。とくに子どもの頃は、今では考えられないが「何か」を無性に怖がることがあったと思う。それは時代とともに失われつつあるのではないだろうか？特に絵本の世界では。しかし怖い話に引きつられる興奮を今の子どもたちにも味わってほしい、そんな気持ちを子どもたちに与え、大人には少しだけ思い出させてくれる、そんな絵本を怪談芸やミステリーの人気作家陣が作り上げた。作・京極夏彦 絵・町田尚子『いるの いないの』、作・宮部みゆき 絵・吉田尚令『悪い本』、作・皆川博子 絵・宇野亜喜良『マイマイとナイナイ』、作・恒川光太郎 絵・大畑いくの『ゆうれいのまち』、作・加門七海 絵・輕部武宏『ちょうどがいきいき』からなる「怪談えほん」たちが思い出されてくれる幻想的な「怖い話」を堪能してもらいたい。

(やまま かりん／岩見沢校4年)



紀伊國屋書店 1997年

斎藤 奈摘=文

『アリスの不思議なお店』フレデリック・クレマン著

マッチ売りが、アリスの誕生日に、とておきのプレゼントを—。世にも不思議な品を売っている少女・アリス。ちょっとやそっとめずらしいからってお気には召さない。そんなアリスの誕生日の贈り物にと、ある行商人のマッチ売りが選りすぐりのコレクションを紹介していきます。いったいどんな品がでてくるのか…。

この本は、画家・絵本作家である著者のフレデリック・クレマンが、娘アリスの誕生日のために描いた特別な一冊。繊細な挿絵や写真、言葉のコラージュによって、世にも不思議な品が次々と素敵でデザインです。登場する様々な品はどこかオカシク、でももし本当にこんな品があったら…、なんて、まるで私たちをいろんなものを空想した子どもの頃に戻ったような気分にさせてくれます。

(さいとう なつみ／岩見沢校3年)

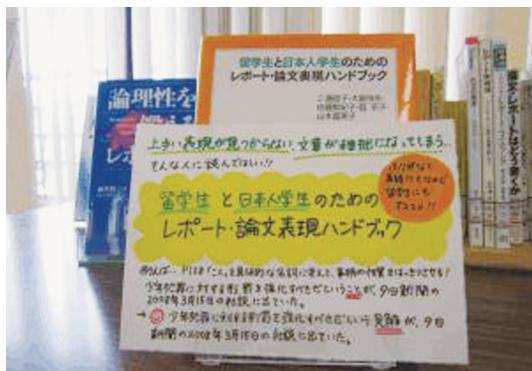
図書館学生サポーター活動報告

附属図書館では、図書館利用を促進するために活動する「図書館学生サポーター」を昨年度から導入しました。各構成館で職員と協力しイベントの企画・運営補助、館内の展示などをおこなっています。今年度の活動をいくつか紹介します。

札幌館での活動

●展示「レポート作成の基礎」

選書、ポップづくり、設営と学生サポーターがそれぞれ担当し、レポート・試験時期に展示をおこないました。実際に資料を手に取っている学生が多く見られ、短期間の内にほぼ全ての資料が借りられてしまう人気ぶりで、「冊子にして配布してほしい」との声もあがるほどの大好評でした。



●展示「読書の木」

葉っぱの形をしたカードに、おすすめの本の紹介コメントを書き込んで展示し、「読書の木」を成長させる、というユニークな企画です。カードのデザインから、実際の展示まで約2ヶ月かけておこないました。図書館入り口前のひときわ目立つ場所に展示したことによって、多くの学生が足を止めて見入っていました。



●ビブリオバトル

ビブリオバトルとは、お気に入りの本を持ち寄って内容を5分間で紹介し合い、どの本が一番読みたくなったかを競うゲームです。今年度初めて開催しましたが、学生サポーターが中心となって事前準備や広報活動をおこなった甲斐もあり、前期に実施した計4回は、各回大勢の観戦者が集まり予想以上の盛況となりました。この様子は、Youtubeでも紹介しています。

8月に開催した「ビブリオバトル首都決戦2012」の本校予選会では、学生サポーターでもある大上泰裕さんが紹介した『凍りのくじら』(辻村深月著)がチャンプ本に選ばれ、北海道ブロック地区決戦に見事進出を決めました。

観戦して興味を持った学生が、後日発表者として参加したり、学外での大会にも積極的に参加したりと、ビブリオバトルが着実に根付いているようです。開催後には毎回参加者同士でおすすめの本や作家を紹介し合う場面も見られ、読書に対する意識が確実に高まっていることを感じます。今後も継続的に開催したいと考えています。

函館館での活動

●図書館内の展示

テーマ決定から本選び、コメントやポスター作成、実際の展示まで行いました。初めは戸惑いながらも、2回目、3回目と回を重ねるにつれて、本の並べ方、見せ方もコツをつかみ、来館者にも非常に好評です。

後期は、学生サポーターの選定により購入した図書を展示します。



●ブログ「図書館日和」の執筆

昨年始めた函館館ブログ「図書館日和」、こちらでも学生サポーターが活躍しています。

おすすめ本紹介“Yondene”では、学生サポーターが交代で函館館にある本から1冊選んで、紹介文を書いています。

さらに函館館長・杉浦先生へ、先生のおすすめ本についてインタビューし、掲載しました。先生への質問を考え、録音した内容を記録し、まとめ



上げるまで大変でしたが、先生の読書経験を率直に語ってもらって読み応えのある内容になったと思います。

教員インタビュー第2弾も企画中です。

<http://hlib.blog.fc2.com/>

釧路館での活動

●オープンキャンパス公開講座開講

6月24日開催の釧路校オープンキャンパスで、『大学図書館は知識の森』を附属図書館釧路館が開講しました。

学生アルバイト、学生サポーターが講師となり大学生活と図書館の関わりについて、授業の課題に取り組む際の資料の集め方、一般の公共図書館との違いや釧路館の特色などを紹介しました。また、学生サポーターによる本の展示コーナーを設置し、賑わいを見せました。



●ビブリオバトル

8月9日に「ビブリオバトル首都決戦2012」釧路校予選会を、学生サポーターによる運営で開催しました。

10月に行われる首都決戦につながる予選会で、発表参加者（バトラー）5名、観戦参加者20名の方々が集まり、白熱のバトルを繰り広げました。

『冷静と情熱のあいだ』を紹介した横関美南子さんがチャンプに選ばれ、9月に開催される北海道ブロック地区決戦へ進出を決めました。

釧路館での今後の開催は未定ですが、開催の折には是非とも参加（発表・観戦どちらでも）していただければと思います。「読書」の新しい楽しみ方をご覧ください。



●月間展示・図書館の広報活動

展示コーナーにて「図書館を知る（6月）」「教師の仕事に迫る（7・8月）」の月間展示を行いました。また、館内の各種ポスターや紹介ポップ、上記イベントの広報、運営など、様々な形で活躍しております。

後期も展示コーナーを中心に図書館の活性化に努めていく予定ですので、どうぞご期待ください。



平成23年度 館外貸出ランキング

平成23年度の館外貸出回数の多かった人気図書を、キャンパス別にランキング形式で紹介します。

各館とも講義やゼミで使用するのではと思われる図書が多くランクインしているようです。

小説では、有川浩さんが全館で大人気です。ランクインした図書以外にも『図書館戦争』シリーズなど多くの図書が借りられています。また『神さまのカルテ』のように映像化された小説も人気があります。



札幌館ベスト5

日本版 WISC-III 知能検査法 理論編
David Wechsler 著（日本文化社, 1998年) 371.7/We/1

日本版 WISC-III 知能検査法 尺度換算表
David Wechsler 著（日本文化社, 1998年) 371.7/We/3

日本版 WISC-III 知能検査法 実施・採点編
David Wechsler 著（日本文化社, 1998年) 371.7/We/2

植物図鑑
有川浩著（角川書店, 2009年)
913.6/Ar

クジラの彼
有川浩著（角川書店, 2007年)
913.6/Ar

函館館ベスト5

もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら
岩崎夏海著（ダイヤモンド社, 2009年) 913.6/196

LD 児・ADHD 児が蘇る身体運動
小林芳文著（大修館書店, 2001年)
378/KO12

学びをつなぐ
滋賀大学教育学部附属幼稚園著
(明治図書出版, 2004年)
376.15/SH27

心理・教育のための統計法
山内光哉著
(サイエンス社, 2009年) 417/Y46

OPI の考え方に基づいた日本語教授法
山内博之著
(ひつじ書房, 2005年) 810.7/Y46

釧路館ベスト5

話し言葉の教育（朝倉国語教育講座：3）
倉澤栄吉, 野地潤家監修
(朝倉書店, 2008年) 375.8/AS/3

阪急電車
有川浩著（幻冬舎, 2009年)
913.6/AR

神様のカルテ 1
夏川草介著（小学館, 2009年)
913.6/NA/1

子どものストレス
桜井茂男著
(大日本図書, 1998年)
371.45/SA

お父さんが叱れない理由
尾木直樹著
(佼成出版社, 2001年)
379.9/OG

岩見沢館ベスト5

脳は美をいかに感じるか
セミール・ゼキ著
(日本経済新聞社, 2002年)
701.1/ZE

運動処方のための心拍数の科学
山地啓司著
(大修館書店, 1984年)
780.19/YA

はじめての書道草書
関根薰園著
(岩崎芸術社, 1999年)
728.4/SE

はじめての書道行書
関根薰園著
(岩崎芸術社, 1999年)
728.4/SE

美の書道
涼風花著
(日東書院本社, 2011年)
728.2132/RYO

平成23年度利用統計

項目		全館	札幌館	函館館	旭川館	釧路館	岩見沢館
開館日数(日)			342	330	335	346	333
内訳	平日		237	231	234	238	235
	休日		105	99	101	108	98
入館者数(人)	293,526	81,861	62,503	65,518	50,829	32,815	
内訳	学内者	280,288	76,938	59,891	65,100	45,838	32,521
	学外者	13,238	4,923	2,612	418	4,991	294
貸出冊数(冊)	96,951	23,324	22,730	23,606	18,704	8,587	
相互利用	文献複写依頼(件)	4,313	1,327	1,441	761	587	197
	文献複写受付(件)	3,073	1,372	521	521	404	255
	図書借用(冊)	2,657	789	692	621	471	84
	図書貸出(冊)	2,468	641	483	413	560	371

利用状況の推移（平成14年度～平成23年度）

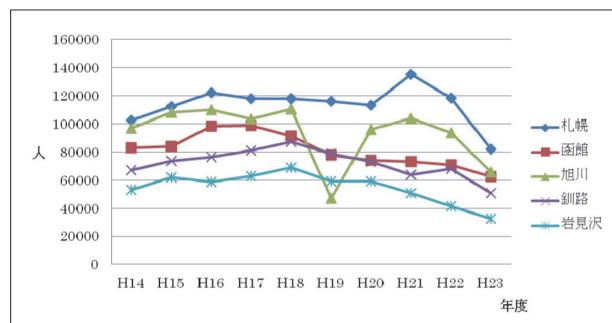
平成23年度の入館者数が大きく減少したのは、前年度12月に入館管理システムを導入したことが一番の要因だろう。ただし、導入によって館内の安全性が高まり安心して利用できるという利用者の声があることも書き添えておく。

貸出冊数は18年度から減少傾向にあったが、21年度以降は増加に転じている。グラフでは分かりにくいが、23年度の全館合計貸出数は、過去10年間で最多である。にもかかわらず入館者数が減少

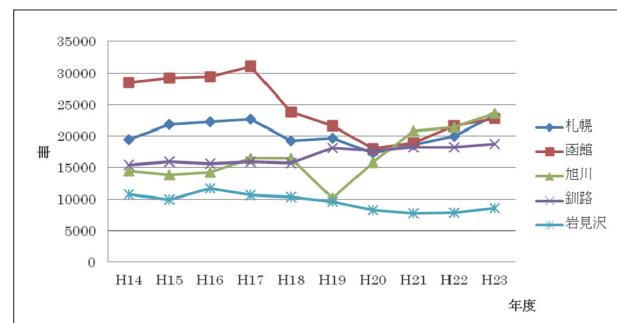
傾向にあるのは、マイライブラリサービス及び電子コンテンツの利用が進み、非来館型利用が増えていることも影響していると思われる。

文献複写依頼件数は、年度によって利用件数にバラつきがあるが、全体としては減少している。23年度の依頼件数は、18年度の約3分の2程度である。電子ジャーナルやCiNii等で必要な文献入手しているからだろう。

入館者数

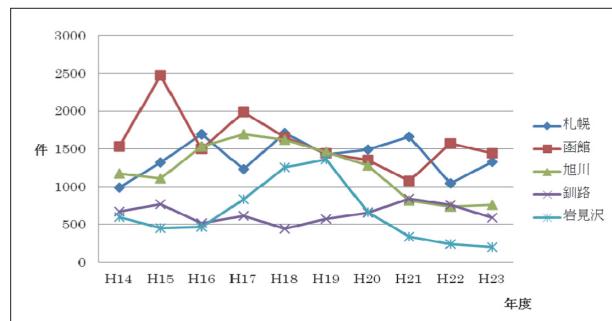


貸出冊数

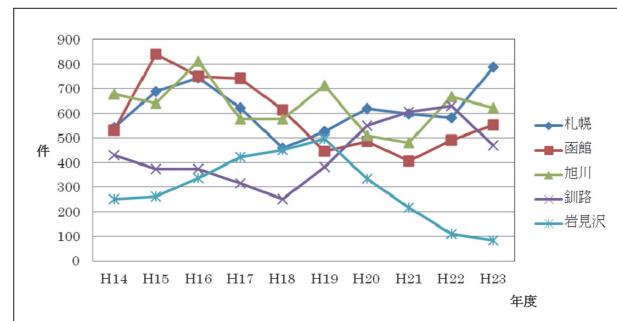


*平成19年度に旭川館の入館者数・貸出冊数が落ち込んでいるのは、耐震改修工事により利用を制限していた期間があるため。

文献複写依頼件数（相互利用）



図書借用数（相互利用）



LIBRARY NEWS

附属図書館からのお知らせ

書評コンテスト2012の開催

本との出会いを大切にし、すばらしい本との出会いを皆さん伝えよう



注目

優秀賞副賞 図書カード 20,000円

佳作副賞 図書カード 5,000円

参加賞 図書カード 500円

自分の選んだ本とじっくり向き合って、自分の考えを整理し、論理的な批評を加えた書評を書いてみませんか。みなさんのご応募をお待ちしています。

【応募資格】 本学学生（学部学生、大学院生、留学生等）

【対象図書】 本学所蔵の図書であること。ジャンルは問わない。

【文字数】 1,200字～2,000字とする。

【応募締切】 2012年11月30日（金）

【応募方法】

(1) 電子ファイル（Wordまたはテキスト形式）をメールに添付して提出すること。

(2) 作品の1行目に、氏名・キャンパス名・課程名・学年・学籍番号、2行目に連絡先（メールアドレス・電話番号・住所）、3行目に、書評タイトルおよび対象図書の書名・著者名・出版社を記載すること。

【応募先】 メールアドレス：somu-lib@j.hokkyodai.ac.jp

件名は「書評コンテスト応募」とし、本文に氏名を明記すること。

【その他】

(1) 応募点数は一人2編まで可。ただし、受賞は一人1編とする。

(2) 応募者自身のオリジナルな未発表作品とする。剽窃・盗用は厳禁。

(3) 入賞作品は、図書館報および附属図書館ウェブサイトに掲載する。

【問合せ先】 電話：011-778-0284

メール：somu-lib@j.hokkyodai.ac.jp

全館共通

電子ジャーナル・データベースのトライアル

以下の電子ジャーナル・データベースのトライアルを実施中です。この機会にぜひお試しください。

- Science online (2012年11月16日まで)
- 「日本文学 Web 図書館」和歌＆俳諧ライブラリー (2012年12月31日まで)
- PsycINFO・PsycARTICLES (2012年10月30日まで)

構成館 Topics

札幌館

- 10月1日から学習用ノートパソコンの貸出を開始します。Microsoft Office 及び無線LAN接続によるインターネットが利用できます。利用の際には学生証をご提示ください。

函館館

- 10月から来年1月まで、本校写真部による写真展を開催します。2週間ごとに展示写真を入れ替える予定です。
- 図書館に置いてほしい本を、書店で直接選んでみませんか？「学生選書ツアー」を実施しますので、ぜひご参加ください。日程等詳細が決まり次第、ご案内します。

構成館 Topics

旭川館

- 現在、学生選書委員会が選書した図書の、第1回の展示準備を進めています。近日中に展示しますのでお楽しみに。第2回目展示も今年中に実施する予定です。

釧路館

- 10月は、学生選書ツアーで選んだ図書の展示をしています。特設コーナーを設け、ポップ付きで紹介していますので、ぜひともお立ち寄りのうえご利用ください。

岩見沢館

- 「大人になった今だからこそ読んでほしい絵本」と題して、夜間開館学生スタッフが絵本の展示・紹介をしています。絵、文章、デザインに注目した絵本を多数展示していますので、ご覧ください。あわせて学生選書ツアーで購入した図書もポップ付きで紹介しています。